

平成三十一年度

神奈川県公立高等学校入学者選抜学力検査問題

共通選抜 全日制の課程 (追検査)

## II 国 語

### 注 意 事 項

- 1 開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
- 2 問題は問五まであり、1ページから14ページに印刷されています。
- 3 答えは、解答用紙の決められた欄に、記入またはマークしなさい。
- 4 数字や文字などを記述して解答する場合は、解答欄からはみ出さないように、はつきり書き入れなさい。
- 5 マークシート方式により解答する場合は、その番号の○の中を塗りつぶしなさい。
- 6 解答用紙にマス目 (例：) がある場合は、句読点などもそれぞれ一字と数え、必ず一マスに一字ずつ書きなさい。なお、行の最後のマス目には、文字と句読点などを一緒に置かず、句読点などは次の行の最初のマス目に書き入れなさい。
- 7 終了の合図があったら、すぐに解答をやめなさい。

受 検 番 号

番

問一 次の問いに答えなさい。

(7) 次の1〜4の各文中の―線をつけた漢字の読み方を、ひらがなを使って現代仮名遣いで書きなさい。

1 不正を**糾弾**する。

3 操縦な性格の持ち主だ。

4 横との間隔を**狭**める。

(4) 次のa〜dの各文中の―線をつけたカタカナを漢字に表したとき、その漢字と同じ漢字を含むものを、あとの1〜4の中から一つを選び、その番号を答えなさい。

a ネットウを**カフ**に注ぐ。

1 紅茶にサトウを**入**れる。

3 近所のセントウに行く。

b ケンシヨウに**応募**する。

1 主君からオンシヨウにお**ず**かる。

3 腕時計がコシヨウ**した**。

c 今春から叔父の家**に**シユクする。

1 職員のコウキを保持する。

3 生活のキバンを整備する。

d 先生の指導にオウ**と**ころが大きい。

1 水面にハモンが**広**がる。

3 いくつかのハツに分かれる。

(5) 次の例文中の―線をつけた「から」と同じ意味で用いられている「から」を含む文を、あとの1〜4の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

例文 雨が降っているから**バ**スに乗る。

1 裏通りから**駆**へ行く。

3 明日から**練**習を再開する。

4 寒いから**窓**を開める。

2 友人から**本**を借りる。

(2) 次の俳句を説明したものととして最も適するものを、あとの1〜4の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

虫の夜の星空に浮く地球かな

大筆 あきら

1 虫の鳴き声は聞こえるものの姿の見えない様子を、多くの星々からその中にある地球、さらに虫々と徐々に焦点を絞りながら「虫の夜」によって印象的に表現している。

2 蛍のように光を発する無数の虫たちと、夜空に光り輝く無数の星々を同時に見上げている作者の浮

き立つような興奮を、「星空に浮く」によって象徴的に表現している。

3 虫の鳴く夜に美しい星空を見上げる作者が、いつの間にか宇宙から地球を眺めているような不思議な感覚に陥った様子を、「星空に」を起点に視点を巻いて表現している。

4 虫の声さえ聞こえない静寂の中、夜空を一人で見上げている底知れぬ孤独を、「地球かな」によって広大な宇宙に浮かぶ小さな地球の姿と重ねながら表現している。

問二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

京で菓子屋を営む「母」は、病のため歩くことができなくなっていた。

その子はなはだ孝にして、常に侍病息らず、医療心を尽くしけれど、**効験**なければ、大ひに憂へて、**祈**る。

清水寺**観音**に**祈**り、日ごとに**詣**でしかど、これもまたしるしあらず。世俗伝へ言ふ、清水寺**観音**に**祈**り

て、しるしあざれば、その舞台といふ高きところより、自ら身を控じ、命を捨てて**祈**るに、その願ひかなふものは、その身つがなし、もしその願ひかなはざるは、身くだけで死するなりと。かの孝子、あま

りせんすべなくや思ひけん、母の命にかはらんと決し、かの舞台より飛びくだる。下ははるかに遠くして、

樹木枝を交へて生ひしけるどころなれば、つがなく落ちくだらんこと、万に一もあらじとみゆるに、不

思議にいささか**毀傷**なし。されど、人事を知らずなりて倒れ伏す。そこらに在り合ふ人々、驚きはせ来り

て救ひ助く。その中に、二者を知れる人ありて、急ぎ菓子屋にはせ行き、かくと告ぐ。**母**聞きもあへず、

大ひに驚き悲しみ、思はず立ちて走り出で、家内の者どもをせりたりて、急ぎ清水寺に行きて、我が子を迎

へ来れと帰りをいらつ。家内も大ひに周章し、追ひ追ひ人をはせせり、取りまぎれて、母の立ちしは、さ

らに心つかず。母も我が子のことのみ憂へて余念なし。ただちにかの子を助け帰りに、気も確かになり、

帰るやいな、母のことを尋ぬる声に、母喜び走り出だしを見て、大ひに驚き、いかに病は癒えたまへるや

と言へるにぞ、母もはじめて心つき、家内の者も、今これを知りて、皆々驚き喜ぶ。その子の孝心深きに

より、観音の恵みを垂れたまひ、かく母は本復し、子もつがなかりけるなりとて、母は涙を流して感喜

し、子の喜びは、言ふもさらなり。

(思齊漫録)から

(注) 清水寺 現在の京都市にある寺。

毀傷 けが。

(7) 線1「かの舞台より飛びくだる。」とあるが、そのときの「子」の説明として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 「母」のためにお祈りをしているのだから、たとえ願いがかなわなくとも、命までとられることはないだろうと決めてかかって飛び降りている。

2 これまで様々に手を尽くしても「母」の病には効果がなかったため、危険は承知の上で、「母」が助かるのであればと決意して飛び降りている。

3 病に苦しむ「母」のためにこれだけ尽くしているのに、自分の願いは聞き入れられ、自分も「母」も助かるはずだと確信して飛び降りている。

4 「母」のためにできることはすべてやってきたので、世間のうわさには懐疑的だが、「清水寺観音」のお告げに従おうと思つて飛び降りている。

(4) 線2「母聞きもあへず」とあるが、そのときの「母」の説明として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 「子」が舞台から飛び降りたと聞いて、なんとかして自ら様子を見に行こうと必死になっている。

2 「子」が舞台から飛び降りたと聞いて、なぜ飛び降りたのか訳がわからず途方に暮れている。

3 「子」が舞台から飛び降りたと知つて、驚きと心配のために落ち着いていられなくなっている。

4 「子」が舞台から飛び降りたと知つて、自分のために危険なことをさせたと悔やんでいる。

(5) 線3「皆々驚き喜ぶ。」とあるが、そのときの「皆々」の説明として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 「子」に指摘されるまでは、「母」が立つて走り出していたことに「母」も「家内の者」も気がついておらず、知らぬ間に「母」の病が治つていたことにはじめて思い至っている。

2 「母」も「家内の者」も「子」のことを心配していたので、無事に帰つてきたことをうれしく感じるとともに、けが一つなかった「子」の幸運をめでたにないこと思っている。

3 「母」のために「子」が舞台から飛び降りたところ、「母」の病が治つていたので、「子」も「母」も「家内の者」も「清水寺観音」のうわさは本当だったのかと感心している。

4 「子」は「母」や「家内の者」を心配させていたとは思ひよらなかつたものの、無事に帰つて来られたことを、「母」や「家内の者」とともに「清水寺観音」に感謝している。

(4) 本文の内容と一致するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 「子」の孝心の深さを試そうと「清水寺観音」は「子」に舞台から飛び降りるよう告げたが、ためらいもなく飛んだので、その勇氣に心打たれて願いを聞き入れた。

2 「母」と「子」の互いを思いやる心が「清水寺観音」に届いたことで、「子」も無事に帰ることができ、「母」も病が回復したのだと「家内の者」は感じ入った。

3 「子」が舞台から飛び降りてもけが一つなく、医者も手の施しようがなかつた「母」の病も治つたことで、世間の「清水寺観音」に対する評判はいっそう高まつた。

4 「母」は、「子」が舞台から飛び降りて無事だったのも自分の病が治つたのも、自分のことを思う「子」の気持ちの強さが「清水寺観音」に通じたからだと考えた。

北海道に暮らす「添馬歩」は、「美美子」や「工藤一惟」とともに地元の高校へと入学した。

美美子はクラブ活動にまよわず硬式テニス部を選んだ。歩にもテニス部に体験入部してみようという動機が、あるにはあつた。それはテレビで見たいホンス・グーラングというオーストラリアのテニス選手

だった。

美美子に聞くと、「かわいよね、グーラング。たぶん生まれつきテニスがうまいんだとおもう。キ

ズミが幹をかけたけのぼつたり、飛び移つたりするみたいで、本能的なの。天才だとおもう。キング夫人は

努力、努力でしょ。泥くさいたらありゃしない。誰にもできない、すごい努力だけ。」と言つた。高

校生になつた美美子の観察眼はさらに磨きがかつていた。

ところがテニス部に体験入部してみると、想像よりはるかに長時間の走りこみや筋力トレーニングを

課せられ、息があがつて最後には吐きそうになるほどだった。終わつて着替えた帰り道、「きついね。」と

歩をねぎらうように美美子は言ったが、中学時代に陸上部にいた美美子にとっては、予想の範囲のトリー

ニングであるらしい。しかもボールを打つことなど夏休みが終わるまで到底できそうにない。三年生の女

子の腕の太さはあきらかに左右で違つていた。ラケットを握る手も少し腫れたように肉厚になつているの

がわかつた。歩は早々にあきらめ、「ごめん、わたしにはとてもついていけない。」と美美子に言った。

入部希望届の提出期限の前日、歩の頭にとつぜん美術室のほの暗い部屋と壁に貼られてあるグリジッ

ト・ライリーのポスターが浮かんだ。やる気のなげな顔を見せることに躊躇がなく、もともとそういう表

情の持ち主なのか、生徒の前ではそのようにふるまつているだけなのかよくわからない美術教師の宗田選

也の顔も浮かんだ。生徒の一部からは宙字ではなく、ソータツと呼ばれるままにしているところもほかの

教師とはちがつていた。最初の授業で退屈そうな顔をしたソータツがポポフ言つていた話も歩のころ

に残つていた。

「絵にうまい下手なんてないんだ。自分は絵が下手だと思つてる奴がいるとしたら、それはちゃんと見て

描いてないだけなんだよ。わかるか？ ちゃんと見ない奴は、いつまで経つてもちゃんと見ない。見た

ないんだろうね、たぶん。その気持ちはオレにもわかる。見えないほうが楽だからね。見渡す限り、なに

もかもピントがびつたりありつて見えてしまつたら、頭がおかしくなつて当然なんだ。人間は適当に聞引い

たものしか見ない。なんとかやつていけるのは、そのおかげでもある。」

美術室に行くと、一年生も三年生もなく適当に散らばつて、それぞれ勝手に絵を描いたり作業をしたり

していた。あいた窓の向こうからサッカー部の練習する音が聞こえてくる。抽象画らしきものを油で描い

ている人がいる。英語の文字がはいったホスタノのようなものを描いている人がいる。トルソの前でデッ

サンをしている人もいる。二つ折りにした画用紙をひらくと折りたたまれていた立体が現れる仕掛けをば

たばた動かしながら、ソータツに意見を聞いている人もいる。ソータツがニコリとせず、「そこが

直つたらスムーズになるけど、つまらなくなるね。」とそつけない声で言うのが聞こえた。

みなバラバラに気ままにやつているように見えた。干渉されず、好きなことをしていいこの雰囲気なら

自分にもできる、でもなにを描こうか、とおもつた。

背後に気配を感じてふりかえると、窓際に工藤一惟が坐つていた。一惟はとつくに気づいていたはずな

のに、歩に声をかけるわけでもなく、ただスツツクに向かつて黙つて手を動かしていた。もう美術

問三 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

部員の顔をしているのがどことなくおかしく、歩の頬が自然にゆるむ。

一惟の前にはサボテンの鉢が置かれてあった。全体に白く細い棘がひろがっているサボテンで、短く刈

り込まれた白髪頭のようでもあり、白カビの生えたおおきなチーメのようにも見えた。

歩は遠慮なく一惟に近づいて、「見ていい？」と聞いた。一惟は、うん、と言った。「まだ全然できてな

いけど。」

一惟のうしろにまわって、歩はおどろいた。細い鉛筆で描かれているサボテンは、目の前にあるサボテ

ンそのものに見えた。光を受けて明るくみえるところと、陰で暗くみえるところ、その中間のグラデー

ションも、見たままだった。この一本の鉛筆だけで描いたのだとしたら、明るい部分はどのように表現す

るのだろう。

「上手ね……昔から描いたの？」

話しかけられたらあきらめるしかない、という願をして一惟は鉛筆を机の上におき、スケッチブックを

閉じた。一惟はこういうときでも音を立てないように物をあつかう。その静けさを破るように、ゴールが

決まったらしいグラウンドから何人も歓声が東になって聞こえてきた。

「図工の時間に描いてただけだよ。」

「すぐちゃんと見て、描くのね。」

一惟は黙っていた。ソータツのことはが頭に残っていてそう言ったのだが、一惟がどう受け取ったかは

わからない。すると突然あることに思い当たり、歩の声はひとりでおおきくなった。

「教会の、お知らせの絵も描いてるの？」

札拝堂の入り口の脇に毎週、画用紙に書かれた枝留教会からの「お知らせ」が貼りだされる。歩はいつ

も、お知らせの内容より先に、下の余白に描かれた絵に目が吸いよせられた。一惟が生真面目な顔と手つ

きで傾きがないように貼り替えているのは何度も見ていたが、絵を描いているのが一惟だとは思ってもよら

なかった。牧師先生が描いているのか、輪読会に誰か絵のうまい人がいるんだとばかりおもっていた。筆

書きの文字は工藤牧師の筆跡だった。

不思議なのは、聖書に関係のあるものが描かれているようにには思えなかったことだ。どんぐり、水差し、

一部におどやかな青かさカケスの羽根、河原の丸い石、とんぼの羽根、といった静物が背景もなく、そ

のまま細密に描かれていた。傷のある黒革の古い聖書が描かれていたこともあったが、あとはいつも単な

る静物だった。聖書も、静物のひとつとして描いていたのではないが。

一惟とは中学校からいつしまったが、同じクラスになったことがなかったので、とびぬけて絵がうま

いとは知らなかった。日曜学校で週に一回、顔をあわせていたけれど、一惟は無口だったし、歩はどこか

で一惟になれなれしくしないように遠慮していた気もする。

歩はいままでになく、気安い声で一惟に聞いた。

「どうしていつも、ああいう絵を描いてたの。」

一惟は腕組みをして答えた。

「そのへんに落ちてたものをひろってきて描いてただけだよ。」

「そう言っていったん口を開きしたが、もう一段小さな声で「……きれいだなと思っで。」とつけくわえ

た。

歩がお知らせの絵を見ていたことを知って、一惟はわずかに表情をゆるませたように見えた。

歩はこの日、美術部に入ること決めた。美術部に入って、自分もデッサンをしてみたいとおもったの

だ。

毎週、ソータツの許可をもらい、外でデッサンをするようになった。校舎の階段の古い手すり、下駄箱

の蓋、跳び箱、水遣の蛇口、用務員のおじさんの乗っている古い自転車、車のサドルを描いたりした。一

惟の絵の真似をしていろいろなものを描いてみたら、どんどんおもしろくなっていった。

美術部員のうち一惟と歩だけが、ひたすらデッサンをつづけていた。抽象画を描いたりポスターを描い

たりしているほかの部員にはどんぐい、見えていたかも知れないが、歩はそんなことはどうでもいとお

もっていた。見せたいものを描いているのではなく、描きたいものを描いているのだから。

夏休み明けの最初のクラブ活動の日だった。終了間際に、ソータツが突然、一惟と歩に声をかけ、自分

の机に呼んだ。

「おまえらのデッサンは、うまいのはうまい。それは認めるんだけど、写真で撮ったほうがもっと似て

じゃないかって言われたら、なんて答えるんだ。」

歩は「おまえら」という言いかたに少しムツとして、イボンヌ・グーラゴングのバックハンドのように

即座にラケットを振りぬぎ、ソータツにボールを打ち返した。

「写真は全部写ってますけど、絵はほんの一部しか描いてないし、ぜんぜんちがうとおもいます。」

歩はそう答えてから、ソータツの質問への答えになっっていないのに気づいたが、黙ってそのままにした。

「工藤はどう思う。」

一惟も黙ったままだった。

一惟は腕組みをした。なにかを考えているようだった。ソータツはすぐに答えを求める教師とはまるで

ちがうから、一惟がなにか言うまで、首をぐるぐるまわしたり、頭を掻いたり、ほかの生徒に「トルン、

もとの位置にかならずおどせよ。」と怒鳴ったりしていた。一惟がやっと口をひらいた。

「見た目はだしかに写真のほうが現物に近いです。でも、写真のピントは厳密に言えば、一か所にか

合っていません。レンズを絞らないで開放で撮ったら、輪郭さえボケてしまいます。ほかの絵も、添島さ

んの絵も、全部にピントがあつているという意味では、カメラにはぜつたいできないことをやっている

おもいます。」

ソータツは一惟をじつと見て、咬くような低い声で言った。

「それとおりだ。……じゃあまた来週な。」

ソータツはささっと机から離れて、美術室のカーテンを閉めはじめた。スケッチブックと鉛筆と消しゴ

ムを、ゆつくり手提げカバンにしまし、一惟の手もとを、自分も片づけの手を動かしながら歩は見ている。

一惟の耳のふちが、うすくと赤らんでいた。

(松家 仁之「光の犬」から。一部表記を改めたところがある。)

(注)キング夫人＝ビリー・ジーン・キング(一九四三～)。アメリカのテニス選手。

ブリジット・ライリー＝イギリスの画家(一九三二～)。

トルソ＝デッサンなどに使用される胴体だけの彫像。

枝留教会＝一惟の父が牧師を務める教会。「枝留」は北海道東部の架空の町。

牧師先生＝一惟の父である工藤牧師。

輪読会＝教人で聖書などを順番に読み、その内容について話し合う会。

カケス＝スズメ目カケス科の鳥。日曜学校＝教会などで主に日曜日に行われる教育活動。

(7) 線1「美術室に行くど、二年生も三年生もなく適当に散らばって、それぞれ勝手に絵を描いたり

作業をしたりしていた」とあるが、そのときの「歩」の気持ちを説明したのもとして最も適するもの

を次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 硬式テニス部とは違い、初心者でも気後れすることなく努力次第で思いきり活躍できそうな雰囲気

で、魅力的な場所だと思っている。

2 周囲に気兼ねせず、自分の意思でそれぞれの活動に取り組んでいる雰囲気が好き、自分にも

やっつけていけるような環境だと思っている。

3 みながバラバラなことをやっているため、部としてのまとまりに欠けているように感じ、あまり好

ましい雰囲気ではないと感じている。

4 好きなことをしていい雰囲気を心地よく感じるが、顧問の助言もなくすべてを自分で決めることが

不安で、入部にためらいを感じている。

(4) 線2「そう言っていたん入口を閉ざしたが、もう一段小さな声で『……きれいだなと思っ

とつけくわえた。』とあるが、そのときの「一惟」を説明したのもとして最も適するものを次の中

一つ選び、その番号を答えなさい。

1 必要以上に干渉されるのを避けるため、そつけなく答えたが、「歩」がお知らせの絵に関心をもつ

ていたことへのうれしさから、少し心をひらき誠意をもって応えようとしている。

2 会話を終わらせてテツサンにもどるため、いい加減に答えたが、「歩」のいくつもの質問からテツ

サンへの興味が芽生えたのだと気づき、美術部への入部を後押ししようとしている。

3 親しくない相手と積極的な会話をつづける気はなく、ぶっきらぼうに答えたが、「歩」の親しげな

態度への心地よさから、もう少し自分の絵や美術部の話をしてみたいと思っている。

4 テツサンの邪魔をされたことがわらずらわしく、簡単に答えたが、言葉足らずな答えによって「歩

の怒りを買ってしまったのではないかと感じ、機嫌を直してもらおうと焦っている。

(5) 線3「写真は全部写ってますけど、絵はほんの一部しか描いてないし、ぜんぜんちがうとおも

います。」とあるが、ここでの「歩」の気持ちをふまえて、この部分を朗読するとき、どのように読むの

がよいか。最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 ひた回きにテツサンへ取り組む自分たちの姿勢が、「ソータツ」に理解されていないことに気を落

としている様子がわかるように、少し投げやりな調子で読む。

2 好きなものを描くという自分が大切にしていた姿勢を「ソータツ」に否定された怒りはあるもの

表には出さないように、ゆっくりと落ち着いた調子で読む。

3 絵を描くことそのものを否定するような話の内容や、人を試すような「ソータツ」の言いかたに違

和感をおぼえていることがわかるように、乱暴な調子で読む。

4 話の内容を受け止めるより先に「ソータツ」の言葉遣いのほうに反応してしまい、思わず言葉が出

てしまったことが伝わるように、少し早めに強い調子で読む。

(4) 線4「全部ピントがあっている」とあるが、その説明として最も適するものを次の中

一つ選び、その番号を答えなさい。

1 対象から受けたぼんやりとしたイメージを、画面の全体を使って表現することで、写真よりも理物

らしく見えるよう描いているということ。

2 心引かれたものに対してじっくりと向き合い、細部の一つひとつまで徹底して見るこ

そのままの姿を丁寧に描いているということ。

3 誰も見向きもしないようなままでテツサンの対象にすることによって、見渡す限りあらゆるもの

を、片っ端から全部描いているということ。

4 テツサンの対象を、肉眼で見える範囲に絞ることで、余計なものも写ってしまう写真では表現でき

ない感動が伝わるよう描いているということ。

(5) 線5「一惟の耳のふちが、うつすらと赤らんでいた」とあるが、そのときの「一惟」を説明し

たものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 自分の言葉が「ソータツ」に受け入れられたことを気恥ずかしく感じるとともに、思いきって自分

の意思を示したことに気分が高揚している。

2 なにか言いたそうな「ソータツ」の言葉を素直に受け取っていかかわからず困惑するとともに、怒

らせたかもしれないと動揺を隠せずにいる。

3 自分の言葉が「ソータツ」から認められたことに感動するとともに、遠回しに絵のうまさ

を評したのだとわかり喜びをかみしめている。

4 生意気なことを言った自分を許してくれた「ソータツ」の言葉に安心するとともに、感情的に反論

した自分の幼さを恥ずかしく思っている。

(6) この文章について述べたものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えな

さい。

1 「ソータツ」への親近感から美術部に入部した「歩」が、徐々に「一惟」への漠然とした好意を自

覚するようになる過程を、二人を見守る「ソータツ」のまなざしを通して効果的に描いている。

2 やりたいことの見つけからなかった「歩」が、「ソータツ」に出会うことでテツサンのおもしろさに

目覚めていくまでの過程を、「一惟」の描いた絵との思わぬ縁にも触れながら感覚的に描いている。

3 「歩」が美術部に入って「一惟」とテツサンをするようになったことで、少しずつ互いに影響を与

え合っていく様子を、「ソータツ」という一風変わった教師を登場させて印象的に描いている。

4 誰に対しても一向に関心をもととしなかった「一惟」が、「ソータツ」との関わりを通して

「歩」の強引な態度にも理解を示していく様子を、かすかな表情の変化によって象徴的に描いている。

問四 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

フリクラインシクとは、それまでのホルトとアツミ(注)を使用した人工登攀への反発から生まれた、己の肉体だけで岩壁を登ることをめざした登攀作法である。ホルトとアツミを使えば天井のように張り出した壁を登ることも不可能ではないが、しかしたとえ壁を登れたとしても行為としての自由度は低い。なぜなら人工登攀では肉体と精神という自分にもともと備わっている能力以外の道具を使って壁を登っているからである。すべて自分の能力だけで登攀をコントロールしているわけではなく、道具による手助けを受けられているので、それが行為の自由を侵しているのだ。ところが、フリクラインにはこうした道具による束縛はないし、行為を制限する限界もない。技術を高めれば自分の身体一つでシムルに、理論上はどこまでも無限に登っていきける。岩壁という困難に対して肉体一つで向かいあったとき、その人は自由になれるのである。

▲冒険者は脱システムすればするほど、これに近い自由の状態を経験することになる。システムというのは人間の行動や思考を方向づけする無形の体系なので、システム内部にとどまると否応なしにシステムによる管理を受ける。A 冒険して脱システムすれば、このシステムによる管理から逃れて、それだけ自由な状態を経験することになる。不安定な自由状態の中で冒険者は、システムの保護によってではなく自分の力で命を管理して安定させる努力をしなければならぬ。生きながらえるために、その瞬間瞬間の出来事や状況に対峙し、自ら適切に判断して物事を処理していかねばならなくなる。

そう考えると冒険の自由とは、すべて自分で考え、決定し、行動を組み立てていかなければならぬ自由だといえる。脱システムの世界には前例や方法論はないので、参照するものが存在しない。現代エピソードとして、脱システムの世界には前例や方法論はないので、参照するものが存在しない。現代エピソードとして、登山のように登山のように登山までのマニュアルもなければ、手伝ってくれるガイドによる固定ロープの設置といった事前のお膳立でもありえない。誰にも干渉されず、束縛を受けず、指示されないぶん、自分の命を、生きるという時間そのものを自分だけで作りあげなければならず、そこにはシステムの管理のもとでは決して得ることのできない圧倒的な生の手応えがある。それが脱システムすることによって得られる自由だ。

ただ、この自由な状態は、自由という言葉のイメージから喚起されるような、ひたすら前向きで無制限なものではない。一般的に自由といふ言葉には勝手気儘(たがひ)にふるまうといったお気楽なイメージがつきまわっており、今の若者は行きすぎた自由を享受しているなどと年長者たちから批判されることもある。だが、冒険で実現される自由の観点からすると、こうした自由という言葉の使われ方は、どこか本質からずれていくように感じられる。なぜなら今述べたように、自由とは混沌とした不確定状態の中ですべて自分で判断して道を切り拓いて命をつむいでいく状態である。もしこうした自由が行きすぎたら、その責任自分にはねかえって行くわけで、普通はその重さに耐えかねて逃れようとするからだ。つまり行きすぎた自由を享受するという状態は、真の自由を知っている者からすると、きわめて恐ろしい状態だといえる。▲

真の自由とは、世間で考えられているようなお気楽な状態ではなく、じつは苦しく、わすらわしく、面倒くさくて、ときには不快でさえある状態のことだ。先の読めない未知と混沌の中ですべてを自分で判断して物事を進めるのは、言葉でいうほど気楽で生易しいことではない。はつきりいつて、システムの内側の世界に留まって自分以外の者に管理と秩序をゆだねたほうが、不自由ではあるが、不安も少なく楽だといえる。人間には生物として命を奪かすような不確定要素をとりのぞこうとする本能があるので、システム(注)の管理下におかれたほうが心は落ち着くだろう。

それに自由には必ず責任がともなうが、この冒険の自由における責任のとり方もかなりシビアなものが

ある。冒険である以上、一歩でも判断をまちがえれば自分の命が失われてしまう危険があるわけ、要す

るに冒険の自由の対価は死、なのだ。自由であることの責任は命で償わなければならぬ。冒険で脱システムしたら、すべて自分で判断してオリジナルな自分の生をつくりあげ喜びを得られる一方、判断ミスは致命的な事態を招く。そのとき、その場の一瞬の判断、一瞬の動作が、自分の生死を分ける。この極度の緊張感の中で達成されるのが冒険の自由であり、自由に対する責任である。極端なことをいえばそういうことになる。B 物事は濃淡があつて、必ずしも冒険の現場で少しでもミスしたら即死ぬというわけではなく、現実には多くのケースでなんとかなるものだが、それでも常にミスしたら致命的事態に陥る可能性がある環境にいる、ということはいえる。このような死に直面した環境の中で、一瞬の判断や動作が自分の生存につながっていることから、その生の手応えは管理されたシステムの中では得られなほど濃密になる。

くのだが、このように冒険における自由とは自力で命を統御できている状態のことである。したがって、より高度な自由を得るためには、自力度を高めればよいということになる。自力は自由を達成するための決定的な契機なので、自力を詳しく考えることで自由とは何なのかということも、角度を変えて考えることができ

る。冒険活動において自力とは自由を高めるための手段にはかならない。冒険者がシステムの外側に飛び出し、未知なる混沌とした領域の中で自由を感じることができ、そこには前例やマニュアルが存在せず、すべて参照物なしに自力で対処しなければいけないからだ。だが現実には自力や自由には制約がある。たとえば、今までの議論からすれば、すべて完全に自力でおこなえば完璧な自由を享受できるということになるわけだから、極端な話、パンツ一枚はかず、すっぽんぼんの全裸になってエベレスト登頂に挑むというような行為こそ究極の自由ということになるだろう。しかし、そんなことをすれば実際にはもの一時間で死亡してしまう。そこで現実的にエベレストに登頂するために、人間はさまざまなモノを用意し、やり方を開発してきた。暖かい防寒衣、耐風能力の高いテント、使いやすいコンロなどを用意し、低酸素状況に対応するための酸素ボンベも持ち込んだ。また、人員や物資を大量動員してキャンプを一つ一つ作りあげていくやり方も開発した。

ところが、このようにモノや人員や過剰な方式が採用されると、より安全になり、登頂が近づく一方で一人の人間における行為の自由度が下がるという矛盾が発生する。モノや過剰なやり方をとんど採用すると便利で安全にはなり、目標の達成には近づくかもしれないが、そのぶんそれらのモノや過剰なやり方がさまざまな点で行為者本人の行動を管理し、縛りつけて、限界を生じせしめるため、自由度は薄れてしまうのである。

冒険の自由を考える際に難しいのはこの点だ。目標の達成を優先し、モノや過剰なやり方を無節操に採用すれば行為の自由度は犠牲になる。一方、自力性を高めてより大きな自由の中で行動しようと思えば、行為は格段に難しくなり、目標は達成できなかもしれない。どつちを重視するかで行為の自身はまったく変わってくる。自力度を高めると命をコントロールする過程に自分が関わる領域が増えて、自分以外の要素に管理される割合が減り、非常に自由な登山を展開できるが、行為は確実に難しくなる。

ひとつだけ断言できるのは、自力性を増し、自由になればなるほど行為は困難になり、内容は濃いものとなるということだ。6 冒険の世界で自力という観念が導かれるのは、こうした理由による。自然というは無垢で混沌とした人智のおよばないカオスとしてそこにあり、その不確定的なカオスに、自分の判断や身体行為をゆだねてしまうような道具や機器を持ち込まずに身につ一つの状態で対峙することで(つまり自力

で、冒険者はより大きな自由を得ることができる。

(角幡 唯介)「新・冒険論」から。一部表記を改めたところがある。

(注) ボルトⅡ登山用のロープを固定するため、岩壁に打ち込むクギ状の用具。

アⅢ 縄ばしご状の登山用具。

エⅡ ストⅡ 世界で最も標高の高い山。

カオスⅡ 秩序のない状態。

(7) 本文中の [A]・[B] に入れる語の組み合わせとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 A しかし B もちろん

2 A つまり B たとえば

3 A だから B なぜなら

(4) 線1「岩壁という困難に対して肉体一つで向かいあったとき、その人は自由になれるのである。」とあるが、それを説明した最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 フリークライマーは人工登攀に対する反発の気持を表現するため、世界中のどんな場所であつても登攀しているという意味で自由だということ。

2 フリークライマーは道具を使わずに己の肉体のみで岩壁を登るため、自分の能力以外の何にも制約されずに登攀しているという意味で自由だということ。

3 フリークライマーは登攀できないような岩壁はそもそも対象としていないので、失敗を恐れずのびのびと登攀しているという意味で自由だということ。

4 フリークライマーは自分の肉体と精神を極限にまで高めているので、道具以外の手助けを受けることなく登攀しているという意味で自由だということ。

(4) 線2「圧倒的な生の手応え」とあるが、それを説明した最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 誰からも干渉や指示などされないうで、自分の思うまま勝手に生きることができるといこと。

2 参照すべき前例や方法論がないので、都合よく自分の人生を決めることができるということ。

3 管理された秩序に守られることで、安定した自分なりの生活を築くことができるということ。

(4) 線3「こうした自由という言葉の使われ方は、どこか本質からずれているように感じられる。」とあるが、筆者がそのように述べる理由を説明した次の文中の [I]・[II] に入れる語句と最も適するものを、本文中の▼から▲までの中から、[I] については六字で、[II] については五字でそれぞれ抜き出し、そのまま書きなさい。

冒険における自由な状態とは、一般に考えられているように [I] ではなく、システムの管理から離れ、[II] の中で自ら適切に物事を判断し、処理することで実現されるものだから。

(6) 線4「システムの管理下におかれたほうが心は落ち着くだろう。」とあるが、その理由として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 システムとは、若くしてわすらわしいことを人に強制はするが、同時にそれらの経験を通して未知と混沌の世界を生き抜く力を与えてくれるものでもあるから。

2 システムとは、人の行動や思考に干渉はするが、不安定な自由状態の中で自分が下した決断に対し責任がはねかえってくることを防いでくれるものでもあるから。

3 システムとは、人の自由な生き方を制限はするが、同時に一瞬の判断や動作をいちいち考える必要がなくなり新たな自由の可能性を開いてくれるものでもあるから。

4 システムとは、何事かを判断する際に人を束縛はするが、同時に予測不能な事態に自分一人の力で立ち向かうという極度の緊張を軽減してくれるものでもあるから。

(4) 線5「現実には自力や自由には制約がある。」とあるが、それを説明した最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 モノや過剰なやり方をいはず、すべてを自力でおこなうことで完璧な自由を享受しようとしても、現実の場面においては、自覚のないままそれらを採用してしまつていくこと。

2 すべてを自力でおこなうことで、究極の自由を実現しようとしても、人間の開発したさまざまなモノややり方を排除することは限界があり、それらに頼らざるを得ないということ。

(4) 線6「冒険の世界で自力という観念が尊ばれる」とあるが、その理由として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 予見できない危険に満ちた自然に自分の判断や身体行為だけで臨むことは、危険度が増して目的の達成は難しくなるが、そのぶん得られる自由は大きくなるから。

2 道具を用いずに自分の肉体のみで人智のおよばない自然に向かつていくことは、それだけ困難な行為ではあるが、無垢で手つかずの自然に触れることができるから。

3 道具を用いずに自分の肉体のみでシステムの外側にある自然に飛び出すことは、安全な日常の生活を捨てることにはなるが、気ままに生きることが許されるから。

4 自分の判断や身体行為だけで不安定な自然に対峙することは、命を統御する過程への関わりは減るが、それと引き換えにより大きな自由を得ることができるから。

(4) 本文について説明した最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

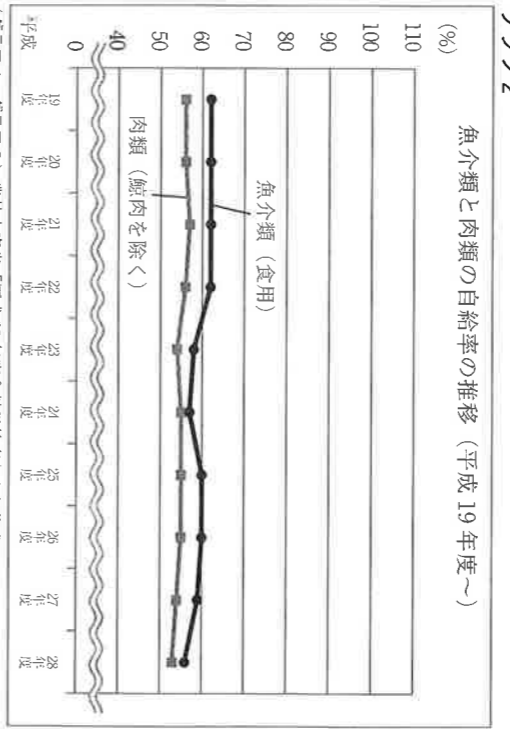
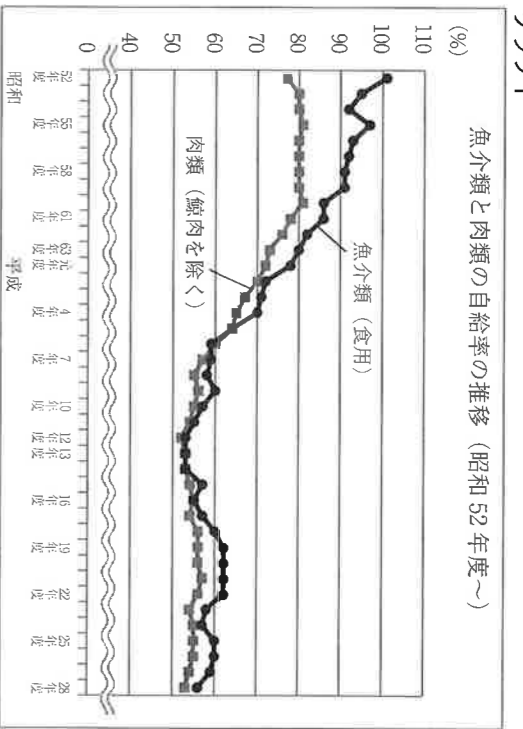
1 何も参照物のない「システム」の中で、すべてを自分で引き受けなければならない自由の厳しさについて、自由という言葉から想起される一般的なイメージにも触れながら論じている。

2 無意識に人間の行動や思考を方向づけている「システム」について、すべてを自分で判断しなければならぬ冒険における自由と自己を自分で判断することによって得られるものだと説明した上で、行為の困難さと内容の充実度との関係を、「脱システム」という概念を用いて論じている。

3 理想的な冒険のあり方とは「脱システム」にしてすべてを自力で判断することだと述べた上で、モノや過剰なやり方に頼らざるを得ない現状を、自分の体験を交えて肯定的に論じている。

問五 中学生のAさん、Bさん、Cさん、Dさんの四人のグループは、「総合的な学習の時間」に魚介類の

国内消費について調べ、発表に向けて収集したデータの扱いに関する話し合いをしている。次のグラフ1、グラフ2、表と文章は、そのときのものである。これらについてあとの問いに答えなさい。



Aさん 私たちはこれまで魚介類の国内消費につ

いて調べてきましたが、今度の発表で使うグラフを作成していたところ、困ったことがあったのでしたね。

Bさん そうです。農林水産省が公表している

「食料需給表」のデータをもとに、魚介類と肉類の自給率の推移を示すグラフをつくらうとしたところ、何年分のデータを示せばいいのかわからなかったのです。そこで、縦軸の目盛りは変えずに、横軸の目盛りだけを変えてグラフ1とグラフ2をつくって

みました。Cさん、グラフ1とグラフ2を比べて印象はどうですか。

Cさん それぞれ小さな変動があるにしても、グラフ全体を大まかにみると、自給率は、グラフ1では **I** ような印象なのに対して、グラフ2では **II** ような印象を受けます。横軸を十年にするか、四十年にするかで、ずいぶん印象が変わりますね。

Dさん そうですね。また、魚介類の消費について私たちが中学生の視点から考えるのであれば、四十年間のデータよりも十年間のデータの方が身近で、扱いやすいように思います。

グラフ1では **I** ような印象なのに対して、グラフ2では **II** ような印象を受けます。

Cさん それぞれ小さな変動があるにしても、グラフ全体を大まかにみると、自給率は、グラフ1では **I** ような印象なのに対して、グラフ2では **II** ような印象を受けます。

魚介類の国内消費仕向量と自給率

	平成12年度	平成28年度
国内消費仕向量	853万トン	579万トン
国内生産量	452万トン	322万トン
輸入量	425万トン	310万トン
輸出量	25万トン	59万トン
在庫増加量	-2万トン	-6万トン
自給率	53%	56%

自給率(重量ベース) =  $\frac{\text{国内生産量}}{\text{国内消費仕向量}} \times 100$

国内消費仕向量 = 国内生産量 + 輸入量 - 輸出量 - 在庫増加量

表示単位:未滿を四捨五入したため、国内消費仕向量と内部の計が一致していない。

農林水産省「水産白書」より作成。

肉類 (鯨肉を除く)

魚介類 (食用)

魚介類と肉類の自給率の推移 (平成19年度～)

(グラフ1、グラフ2) 農林水産省「平成28年度食料需給表」より作成。

Cさん 四十年の間に生活様式や食の好みなどは変わっていますからね。反対に、漁業や畜産業について何らかの意見をまとめる場合には十年間のデータでは足りないように感じます。

Aさん そうですね。他にも発表の準備をしていて気がついたことはありますか。

Dさん 私は、自給率だけを見てもわからないことがあると気づきました。魚介類の自給率は平成十二年度を底にして、近年は構ばい傾向にあります。その平成十二年度と比べて、平成二十八年度の自給率は上がっているで、国内生産量は増えていると思っていました。ところが、実際は減っていたのです。

Cさん 私もう思っています。自給率は上がっているのに、国内生産量は減っているのですね。Dさん そのことを考えるために、表を見てください。平成十二年度は五十三パーセントだった自給率は平成二十八年度には五十六パーセントに上がっています。ところが、平成二十八年度の国内生産量は平成十二年度の七割程度なのです。

Aさん 国内生産量が減っているのに、どうして自給率は上がっているのですか。

Bさん あくまで自給率というのは、割合だからです。表にあるように、ここでの自給率は「国内消費仕向量」に占める「国内生産量」の割合のことです。「国内消費仕向量」とは国内で消費に回された

量のことです。「国内生産量」と「輸入量」、「輸出量」、「在庫増加量」から求めます。Cさん なるほど。では、自給率の増減を考えると、たとえば「**III** 自給率は上がる」のですね。

Aさん では、平成二十八年度の魚介類の自給率が上がった理由をまとめましょう。Dさん 平成十二年度と比べ平成二十八年度の国内生産量は減っているのに、自給率が上がったのは、自給率の上昇が国内生産量の増加を意味するとは限らないということがよくわかりました。

Bさん 確かに、自給率だけを見てもわかりませんでしたが、発表では、自給率の計算方法を説明し

たり、国内生産量や輸入量などの数値を紹介したりするようにしましょう。Aさん ここまで収集したデータの扱い方について話し合ってきました。グラフ1とグラフ2の比較から

は、伝えたい内容に合わせて収集したデータの使用範囲を工夫すること、表からは、示されている数値のみではなく、その数値の意味するところや求め方まで正確に理解することが重要だとわかり

ました。これらを踏まえ、発表準備を進めていきましょう。(7) 本文中の **I**、**II**、**III** に入れるもの組み合わせとして最も適するものを次の中から一つ

選び、その番号を答えなさい。

- 1 I 低下している II 低下している III 輸入量が増える
- 2 I 変動していない II 低下している III 輸入量が減ると
- 3 I 低下している II 変動していない III 輸出量が増える
- 4 I 変動していない II 変動していない III 輸出量が減ると

(4) 本文中の **I**、**II**、**III** に適する「Dさん」のことは、次の①～④の条件を満たした一文で書きなさい。

- ① 書き出しの **自給率が上がったのは**、という語句に続けて書き、文末の **からだと考えられます**。
- ② 書き出しと文末の語句の間の文字数が二十字以上三十字以内となるように書くこと。
- ③ 表から読み取った変化の具体的な内容に触れていること。
- ④ 「国内生産量」「国内消費仕向量」「割合」という三つの語句を、それぞれそのまま用いること。

(問題は、これで終わりです。)



受検番号							氏名
0	0	0		0	0	0	
1	1	1	1	1	1	1	
2	2	2	2	2	2	2	
3	3	3		3	3	3	
4	4	4		4	4	4	
5	5	5		5	5	5	
6	6	6		6	6	6	
7	7	7		7	7	7	
8	8	8		8	8	8	
9	9	9		9	9	9	

受検番号は左から書くこと。

問一									
(エ)	(ウ)	(イ)				(ア)			
		d	c	b	a	4	3	2	1
1	1	1	1	1	1				
2	2	2	2	2	2				
3	3	3	3	3	3				
4	4	4	4	4	4				

\*解答欄は裏面にあります。  
\*解答欄は裏面にあります。  
\*解答欄は裏面にあります。  
\*解答欄は裏面にあります。

各四点

各二点

問五	
(イ)	(ア)
	1
	2
	3
	4

\*解答欄は裏面にあります。

(ア)は四点、(イ)は六点

問四							
(ク)	(キ)	(カ)	(オ)	(エ)	(ウ)	(イ)	(ア)
1	1	1	1		1	1	1
2	2	2	2		2	2	2
3	3	3	3		3	3	3
4	4	4	4		4	4	4

\*解答欄は裏面にあります。

(ア)は二点、(エ)は両方できて四点、他は各四点

問三					
(カ)	(オ)	(エ)	(ウ)	(イ)	(ア)
1	1	1	1	1	1
2	2	2	2	2	2
3	3	3	3	3	3
4	4	4	4	4	4

各四点

注意事項

- HBまたはBの鉛筆(シャープペンシルも可)を使用して、○の中を塗りつぶすこと。
- 答えを直すときは、きれいに消して、消しくずを残さないこと。
- 数字や文字などを記述して解答する場合は、解答欄からはみ出さないように、はっきり書き入れること。
- 解答用紙を汚したり、折り曲げたりしないこと。

良い例	悪い例		
	線	小さい	はみ出し
	丸囲み	レ点	うすい

問五		
(イ)		
からだと考えられます。		自給率が上がったのは、
	20	

30

問四
(エ)
I
II

問一			
(ア)			
4	3	2	1
(める)			

氏名

受検番号